

竹内式自立支援アプローチⅠ ～水分摂取量増加による変化～

介護老人保健施設
春日リハビリテーション・ケアセンター
○久保田和代、菊地恵美、板橋茂子、
古内友幸、小針可奈子、阿部英人、
江連一也、小嶋健太

【はじめに】

在宅復帰塾にて、自立支援の取り組みとして（水分・食事・排泄・運動）の関わりが大きな成果を出している。しかしながら、この研修会に参加した施設では水分摂取量が少ないことが分かった。そこで、水分アプローチに着目し水分量の増加が、身体・精神状態の改善に有効性があるかを検証した。

【対象者】

H21.4～H22.4 までの入所者 98 名（基礎疾患・水分制限・経管栄養の方は対象としない）

【方 法】

- 1.水分摂取が可能な方に水分量 1500ml を目標に促す
- 2.介入前後での水分摂取量の変化、HDS-R、Barthel Index（以下 BI）の 3 項目で検証
- 3.チームアプローチの展開

【結 果】

介入前と介入後の比較

n=98

	介入前	介入後	有意水準
水分量	983ml	1195ml	P=1.12
B I	46 点	53 点	P=0.58
H D S-R	14 点	15 点	P=0.59

HDS-R20 以上・以下との比較

	介入前	介入後	有意水準
HDS-R20 点以上（42 名）	1065 ml	1297ml	p =0.00
HDS-R20 点以下（66 名）	947 ml	1160ml	p =0.16

【考 察】

在宅復帰塾の参加で、自立支援の取り組みとして水分摂取の重要性を学んだ。結果、コップ 1 杯分のアップとなったが有意差はなかった。HDS-R20 点以上・以下の比較では、HDS-R20 点以上は有意差があった。しかし、HDS-R20 点以下の方は、介入後の結果はアップしているが有意性はなかった。これは、認知症ケアのタイプ別判断を適切に行っていなかったことが原因と考えられる。介入の間違いから水分摂取が進まないケースが多かった。心理・行動・環境の側面からアセスメントし食事・排泄・運動の個々のニーズに合わせた基本ケアを行うなど、チームアプローチにより更なる工夫・実践への取り組みを行うきっかけとなった。結果、介入前の在宅復帰率は 34%であったが現在 6 ヶ月平均在宅復帰率は 62%で推移している。スタッフの「より良くしよう」という意識付けとなり自立支援プログラムのケアのシステム化を図ることができた。老人介護保健施設の役割でもある在宅復帰、在宅生活支援の効果に結びつき、施設において寄与する研究となった。